

郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史 三本木

三本木は、町の南東端に位置しています。地形は、鬼怒川の西側を江川が南流し、東側は鬼怒川を隔てて真岡市と接しています。慶安郷帳には三本木村の村名が記載されています。天保年間（1830～1844）の家数は、15戸です。江戸時代の初めは烏山藩領で、その後は幕府領・旗本領となり幕末を迎えます。徳川幕府の日光社参の際には、小金井宿の助郷役を務めました。助郷制度は、宿場町の交通量の増加による人馬不足を補うための制度で、三本木村とその周辺の村々は小金井宿の助郷村となっていました。しかしながら、助郷役は



※大字界は正確ではありません。

その労力の割に見返りが少なく、村人達にとっては大変な負担でした。

字北原には、地区の鎮守である稲荷神社が鎮座しています。稲荷神社は農耕の神であり、屋敷神としても古来より信仰されています。鬼怒川右岸の肥沃な土地に開けた農村・三本木の鎮守に最適な神様といえます。

江戸時代、三本木の集落より北方約3キロの地点に鬼怒川の水運を利用した三本木河岸が設けられました。

河岸は、船から荷物や人を揚げ下ろしする川の港のことです。三本木河岸からは、米などの農産物が江戸に運ばれ、塩や肥料などが各地から入ってきました。まさに江戸時代の経済を支える大動脈であり、明治時代に鉄道が発達するまで主要な物流ルートとして利用されていました。

三本木河岸がいつ頃設置されたかは定かではありませんが、文化6年（1806）の『七河岸議定証文』には、船問屋の「三本木河岸佐右衛門」という人物の名が

みえます。また、安永3年（1774）の『船問屋株連上』には、公認の河岸であることが記されています。上流には東蓼沼河岸、下流には本吉田河岸（下野市）、対岸には大沼河岸・粕田河岸（真岡市）がありました。三本木河岸は、交通の要衝として重要な役割を担っていたことでしょう。

さて、三本木という地名には2つの由来があり、そのどちらも河岸の目印になっていた大木とする説です。ひと

つは村落にある2本の杉の大木と1本の檜の大木、もうひとつは川原にあった3本の柳の高木が河岸の目印になったとする説です。これらの大木は、今はもう残っていませんが、地名の痕跡を探しに出掛けてみるのも面白いかもしれませんね。



鬼怒川の三本木河岸があった付近（※ 奥は鬼怒大橋）